



# 弘大農学部同窓会会報

## 第9号

昭和63年6月30日 発行  
発行 弘前大学農学部同窓会  
TEL. 0172-36-2111  
振替 盛岡4-564番  
印刷 (株) 笹 軽印刷



## 都市と農村

農学部同窓会会長 岩井邦彦

(弘前市都市計画部長)

私事になりますが、何故か私は、昭和58年4月に、それまで勤続していた農林部から、都市計画部にまわされ、全く経験のなかった仕事をやらされることになりました。

村づくりから、町づくりに変わったばかりではないかと慰められたことを思い出します。

この5年間位の間に、世の中は余りにも大きな変化があったことは皆さんもよくご承知のことです。

中でも、今、日本の農業・農村は、かつてない厳しい試練の前に立たされています。

昭和57年58年頃の農政審の報告や農業白書では、農業の低迷状態からの脱出について、厳しいながらも先の明るさも感じとれるものでありました。

以下字数の都合で農村問題についてのみ触れますが、その後、国の四全総が出され、都市と農村の融合論、都市化社会の中での都市と農村の補完関係が提起され、更に昭和61年62年度の農業白書にあるように、農村に賦存する様々な地域資源を見直し、その有効利用を図ると共に、都市住民と農村の交流、都市と農村の問題がクローズアップされています。

いささか手前味噌になりますが、我が弘前市の経済の大きな寄りどころであった農業はその比重を著しく低めており、毎年のように

異常気象に悩まされているのに加えて、世界中から批判され、我が国の農業保護政策がなしくずしにされ、本市の農業生産の2本の柱の一つである米は、生産者米価が下げられるし、日本一の生産量を誇るりんごは、外国からの輸入におびえている状況にあります。

従って、否応なしに合理化が迫られており効率的な経営を確立するに伴い必然的に多くの離農者が他に職を求めて結局は市街地に集まるようになると思われます。

21世紀の初頭には、我が国のDID人口が全人口の7割を超えることがほぼ確実視されております。

又、農業以外の零細な各種の営業(特に小売業)においても、その生産性の低さや、高度化や市民ニーズへの対応に欠けることから脱落する者が多くなっている事実も見逃すことができません。

そこで、これらを吸収する施策が、弘前のような中規模の地方都市にも求められているところで、これを乗り越えることができなければ市勢は衰退の途をたどらざるをえません。

その対応策として、それらを吸収できる就労の場を創り出すことが急務です。

長期的には労働型産業や先端型産業等の企業誘致が望ましいわけですが、今すぐそれが



実現できると思われません。

そこで、最も実現性の高い対応策の一つとして、弘前と云うまちの個性・素質を充分生かして、「魅力あるまちづくり」と云う手法によって、新たな就業の場を創り、市外・県外からも来街者を集め、そしてそのことが同時に都市基盤の整備促進となり、雇用吸収力となって、ひいては都市間競争に勝って、21世紀への生き残りを確実にすることを狙いとするのが早道ではないかと考え努力しているところです。

又、農林行政サイドからの農村部、特に近郊集落に、そのすぐれた田園的な景観を残しながら、定住化を図ることも重要な課題となっています。

農村部においても、その居住環境の整備が求められているところであり、下水道や新たなシンボル施設や緑地広場等の整備は欠くことのできない要件となっています。

都市近郊集落は、元来農業を中心として発展し、一定のコミュニティが形成され、特有の田園景観も保持されていましたが、混住化の進展に伴い都市的生活環境や都市的利便に対するニーズが高まっており、一方では、都

市的土地利用と農業的土地利用との間に新たな緊張関係が生じています。

この時に当り、昨年6月に公布された、集落地域整備法は、建設省と農林水産省とが共同で提案したもので、都市的なものと農村的なものとの調和された新たな居住空間の形成として、しかも新しいタイプの生活圏の整備を進めようとするものであります。

建設省サイドでは、田園居住区整備事業を昭和63年度から新設し、一定の範囲内での公共投資を推進すると共に、宅地需要への対応と集落の維持振興に新たな視点で取り組むことになりました。

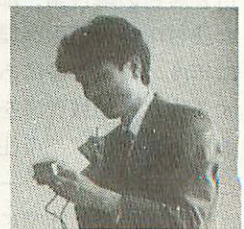
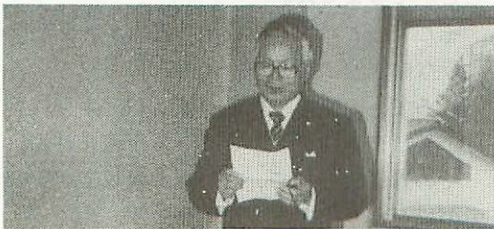
紙面の都合でその内容までは触れませんが、これまで都市計画と農業（農村）計画と云う二分法的体系と画一的な行政制度のもとに置かれてきた我が国の地域行政史上、画期的な意義を有するものと評価されてよいと思います。

私なりに微力ではありますが都市と農村の交流と融合に頑張るつもりです。

終りにりましたが、同窓会の皆様のご今後の御活躍と御健勝をお祈り申し上げます。

## 卒業おめでとぅ

去る3月23日62年度の卒業式が行われましたが、同窓会は卒業された133名の皆さんを新しく正会員として迎えるために、盛大な歓迎会を催し、農学部長はじめたくさんの方からお祝いと励ましの言葉を頂きました。また新正会員を代表して、田口淳一君と三浦良成君から御礼と決意の言葉がありました。





祝

御卒業

農学部長 田 辺 良 則

御卒業おめでとう。心からお祝い申し上げます。所定の単位を取得し、困難な卒業研究を為し遂げての卒業で、皆さん、どんなにか嬉しく、またどんなにか希望と期待にあふれ、だが一扶の心残りかと思えます。

嬉しいというのは、大事業を為し遂げた嬉しさで、特に卒業研究は困難な大事業であったと思います。10月頃からの農学部は文字どおり不夜城で、皆さん門限の制約をおしてよく頑張りました。農業部の不夜城ぶりは新聞記者などからもよく指摘されるところですが、高い光熱費を我慢して、認めてきてよかったと思います。卒業研究のテーマの設定、研究方法の確定、研究計画のなかでも実験・調査計画の策定と実行、結果の分析と叙述、本当によく頑張りました。この経験は、実社会に出ても大いに役立つでしょう。なによりも始めから終わりまで終始一貫した事業として為し遂げたことは、大いなる自信となって皆さんを支えてくれるでしょう。

希望と期待に溢れるというのは、学園を巣立ち羽ばたかんとするその心です。「今日だけはお岩木山が低く見え」と旧制弘前中学校の卒業生が歌ったそうですが、朝な夕なに振り

仰いできたあの岩木山が低く見えるほどに、希望と期待に胸弾ませているということです。

心残りというのは、卒業研究にも不安が残り、あれも読みたいこれもしたいと思ったことの何分の一もやれなかった心残りです。でも御安心ください。何十年と研究を続けてきた研究者でさえ、なお自分の論文に満足しているという人はほとんどいないのですから。そしてまた、「我が青春に悔い無し」我が学園生活に悔い無しといえる人もほとんどいないのですから。しかも、この心残りこそ、次なる飛躍、次なる完成へのスプリング・ボード飛躍台になるのですから。どうか皆さん、今日のこの喜び、この希望と期待、この心残りを大切にしてください。この感激を胸に、この農学部を巣立って行って下さい。旧制高知高等学校初代校長江部淳夫先生は就任挨拶で生徒に呼びかけました。「若人よ、感激をもって。感激なき人生は空虚なり。」と。私もまた、私の青春を支えてくれたこの言葉を皆さんに贈りたいと思います。「若人よ感激をもって。感激なき人生は空虚なり。」と。以上をもちまして私の挨拶といたします。

## 新しく迎えた正会員の皆さん

### 農 学 科 (24名)

#### 農学コース (14名)

小島 智子 (育種) 東北日本電気ソフト(株)  
佐々木 琢磨 ( ) 全国農業協同組合連会  
下堀 亨 ( ) 農林水産省新冠種畜牧場  
八木橋 明浩 ( ) 青森県鯉ヶ沢地区  
農業改良普及所  
渡辺 敏弘 (畜産) 福島県農業試験場  
大高 謙司 ( )  
佐々木 保 ( ) 自営農業  
佐藤 司 ( )

上原子 俊之 (畜産) 青森県職員

石本 岳之 (作物) 自営農業

辻 智之 ( ) 映画写真

笠井 雅史 ( ) 青森県五所川原地区  
農業改良普及所

木村 純 ( ) 日糧製パン(株)

原田 幸治郎 ( ) 北海道和弘食品(株)  
茨務勤務

#### 農業経済コース (10名)

佐々木 浩樹 (経営) ユニオン貿易(株)

早坂 正剛 ( ) 生活協同組合市民生協  
(札幌)



今堀 皇 (流通) (株)サンショップヤマザキ  
 山田 浩司 (〃) 日本生命相互会社  
 (東京勤務)  
 吉田 繁 (〃) 農林漁業金融公庫秋田支店  
 安宅 道人 (経済) 京福電気鉄道(株)  
 阿保 静孝 (〃) 青森地区農業改良普及所  
 外川 吉彦 (〃)  
 仲島 健 (〃) (株)足利銀行  
 工藤 睦典 (〃) 日本制御システム(株)

## 園芸化学科 (45名)

飯塚 兼仁 (園産) 花春酒造(株)  
 生江 隆 (〃) ライフフーズ(株)  
 小山田香里 (〃)  
 木内 照江 (〃) プリマハム(株)  
 岸 博之 (〃) 青森県むつ市立  
 近川中学校 (教員)  
 工藤寿美子 (〃) (株)東北ニチイ  
 日下美智子 (〃) 青森県農業協同組合中央会  
 佐々木聖人 (〃) 弘前大学大学院農業研究科  
 佐々木基之 (〃) (株)創建コンサルタント  
 坂本 士文 (〃) ダイヤモンドシステ開発(株)  
 成田 澄人 (〃) 青森県職員  
 水島 智子 (〃)  
 築瀬真理子 (〃) (株)経調  
 小笠原香乃子 (生化) 岩手県大東町立興田中学校  
 小山 明美 (〃) 東北日本電気ソフトウェア(株)  
 北山 美子 (〃)  
 工藤佐江子 (〃) シグマシステムズ(株)  
 今野 一茂 (〃) ヘキストジャパン(株)  
 今野美和子 (〃) 皆瀬農業協同組合  
 佐々木 直 (〃) 宮古市役所  
 渋谷恵美子 (〃) 十和田地町農業改良普及所  
 田川 信 (〃) 吉富製菓(株)  
 田口 信一 (〃) 岩手県職員  
 竹森 茂 (〃)  
 長牛 敬次 (〃) エセックス日本(株)  
 能登谷典之 (〃)  
 山本 等 (〃) 持田製菓(株)  
 市川 直之 (農産) 伊藤ハム(株)東京事務所  
 小野塚 真 (〃) 日本リーバ(株)  
 笠原 義史 (〃) マイクロデータ(株)  
 菅原 猛 (〃) プリマハム(株)  
 高野 政人 (〃) 農業 (自営)

谷川 公彦 (農産) 弘前大学農学部研究生  
 土田 一義 (〃) 雪印乳業(株)  
 東 和弘 (〃) 旭川地方卸売市場(株)  
 石井 昌文 (土肥) エバラ食品工業(株)  
 石塚 善 (〃) 弘前大学理学部聴講生  
 葛西 昭仁 (〃) (株)オカムラ食品工業  
 小嶋由美子 (〃) 弘前大学理学部聴講生  
 甲田美喜雄 (〃) 天間林村役場  
 佐藤 英明 (〃)  
 杉浦 美保 (〃) (株)創建コンサルタント  
 谷内 豊 (〃) 青森県職員  
 本田 睦代 (〃) 伊藤光学工業(株)  
 三塚 直江 (〃) 日本シーベルヘグナー(株)

## 農業工学科 (31名)

## 農業機械コース (12名)

麻生 祥之 (機械) 檜崎産業(株)  
 岩淵 尚之 (〃) (株)大和システム  
 エンジニアリング  
 小笠原 涉 (〃) 青森食糧事務所  
 工藤 泰陽 (〃) 青年海外協力隊  
 金 知康 (〃) 弘前大学大学院  
 農学研究科  
 沢 貴雄 (動力) (株)ヨークマツザカヤ  
 織田 弘之 (〃) (株)丸山製作所  
 落合 賢一 (〃) 弘前大学大学院  
 農学研究科  
 野部 徹 (〃) 岐阜ダイハツ販売(株)  
 松岡 毅 (〃) 北奥羽信用金庫  
 松原 柄男 (〃) (株)イチノウ  
 三上 正喜 (〃) 共立エコー物産(株)

## 農業土木コース (19名)

稲葉 力三 (造施) ケミカルグラウンド(株)  
 竹内 幸一 (〃) 関東農政局 霞ヶ浦用水  
 農業用水水利事務所  
 中田 雅信 (〃) 三幸建設工業(株)東北支店  
 葛丸ダム出る張所  
 宮崎 範光 (〃) 北海道開発局  
 帯広開発建設部  
 宮部 康之 (〃) 滋賀県土地改良事業団体  
 連合会能登川事業所  
 竹内 徹 (〃) 新潟県庁  
 大木 公正 (水利) 北海道釧路支庁  
 耕地管理課  
 加地 博 (〃) 秋田県雄勝農林事務所  
 土地改良課  
 三上 浩二 (〃) 宮城県農政部 農地計画課  
 鈴木 禎也 (〃) 青森県北土地改良事務所



対馬 勝治 (水利) 板柳町役場  
 中村 明夫 ( ) 東北農政局  
 太田 賀久 (農地) 青森県中南土地改良事務所  
 加藤 純夫 ( ) 中信情報システム  
 高谷 裕継 ( ) 長野県松本地方事務所  
 田代 弘之 ( ) ㈱第一勧銀  
 藤田新二郎 ( ) 東北農政局  
 星野 敦彦 ( ) 日本道路㈱札幌勤務  
 木村 聡 ( ) タムラ製作所

## 園芸学科 (26名)

東 秀典 (蔬菜) 青森県職員  
 天田 徹也 ( ) 群馬県教員  
 飯島 敏郎 ( ) 弘前大学農学部研究生  
 岩瀬 直樹 ( ) 弘前大学農学部研究生  
 佐藤 成利 ( ) 一関農業改良普及所  
 佐藤 寿 ( ) 日東興業㈱  
 田口 淳一 ( ) 秋田県職員  
 阿部 恒 (果樹) キューピータマゴ㈱新潟支店  
 川村 浩美 ( ) 岩手県久慈農業改良普及所  
 志藤 宜徳 ( ) 自営 (農業)  
 神 義信 ( ) 山形食糧事務所  
 対馬 静雄 ( ) 東北農政局  
 松谷 龍雄 ( ) 東北化学薬品  
 水野 昌紀 ( ) 塩田農業協同組合  
 渡辺 昭夫 ( ) 自営業 (果樹栽培)  
 岩館 聖治 (植病) 青森県職員  
 岩本 浩也 ( ) 青森県大間町立大間中学校  
 小野 拓也 ( )  
 工藤 美雪 ( ) 弘前大学農学部研究生  
 田口 敏之 ( ) ㈱タカタ  
 館下 輝一 ( ) 北海道食糧事務所  
 中里 秀昭 ( ) ホクレン農業協同組合連合会  
 速水 健一 ( )  
 菅原 寿昭 (昆虫) 岩手県臨時教員  
 菅原 雄二 ( )  
 根岸 清子 ( ) 岩手県職員

## 大 学 院

## 農学科 (3名)

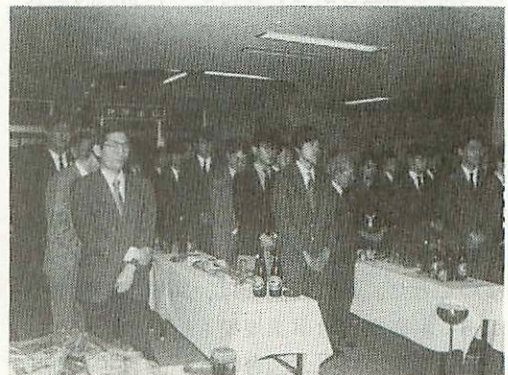
福士 浩行 (畜産) 青森県野辺地区  
 農業改良普及所  
 三浦 良成 ( ) 中部病院  
 渡辺 克司 (経済) 北海道大学大学院  
 農業研究科(博士課程)

## 園芸化学科 (1名)

石藤 一馬 (生化) 福島県職員

## 園芸学科 (3名)

土肥野 幸利 (蔬菜) 東京都杉並区役所  
 (土木部公園課)  
 瀬野 栄一 (昆虫)  
 田中 一裕 ( ) 北海道大学大学院  
 農業研究課(博士課程)





## 思い出を残して……

今河先生、沢井先生、坪松先生、そして花田先生が退官され、豊田先生が筑波大学に転任されました。多くの同窓生に対する暖かいご指導ありがとうございました。

## 私にとって同窓会とは

私のところには、時々小学校、中学校の同窓会報がくるほか、一大学の卒業なのに大学の同窓会報が毎年二冊届く。農学部卒だから農学部からと、学部の一部が分離独立した獣医学部とからだ。従って同窓会費も記念事業費も双方から徴収される。しかしわが校舎は撤去されて跡形もなく、両学部とも其処から離れているので、同窓会と大学の密着したイメージは今もって湧かない。しいて言えば、同窓会名簿だけで両学部につながっているに過ぎない。そういう事情から同窓会の認識も名簿発行と時に行う記念事業の醸金の仲介程度としかない。そう考える理由に、道農試時代、場運営は寄付受納を避け、道予算で行うこととの指導の影響もある。しかしクラーク会館建設、百周年記念、学术交流基金などの要請が屢々あり、疑問視していたというのが学外にいた時の卒直な印象である。その程度の浅簿な知識しかない私だから、弘大同窓会についても同然視するのは無理もない。

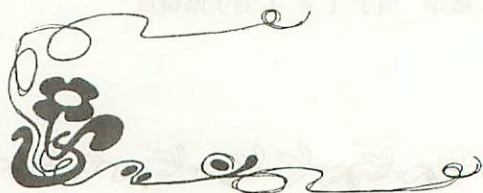
ところが、一旦学内に入ってみると予算が窮屈で、何を企画し、何を実行するにも同窓会に頼らねばできないことを知った。すなわち毎年の行事である卒業式パーティー、記念写真から20周年、30周年などの創立記念事業に至るまで同窓会なしに大学行事は考えられないことだ。最近の例では、30周年記念事業がある。従来とは事業規模も桁違いに大きい植樹、彫塑の建立、図書購入、記念誌・研究誌の発行、講演会、式典及び祝賀会が、大臣、国会議員、知事、地域の名士など多数出席のうえ盛大に行われたが、それがすべて同窓会

## 坪松戒三

員諸氏の絶大な厚志によるものであり、その偉大さに敬意と謝意を表すると共に、同窓会と学部の密着不離、同窓会依存性向を存分に思い知らされた機会でもあった。

一方、多くの会員にとっての同窓会も、私の以前の認識と大同小異であろう。しかし会報によって友人の消息を知ると共に、闘志を湧き立たせて人生の励みとし、新規の道を開拓するきっかけを作る意味で人生の友となり、また記念事業などの醸出により、後輩へ好ましい教育環境を提供し、有為の人材を送る大学教育の使命を補完して、社会参加の一翼を担うとの認識に立てば、そう大きな負担とは感じない筈である。同窓会の存在の意義を理解し、将来とも何分の御協賛を懇願する。昨今、経済大国であるわが国に、後進国又は飢餓地域への援助を期待する声が大きく、国際的な風潮になっている。それに便乗する訳ではないが、学部発展のため後輩のための協力を切にお願いしておく。

同窓会員も62年度分を含め2,760名、会も十指に及び支部を結成し、今年度新役員の選出と共に衣更えした。その昇竜の年に、退官するのも何かの因縁と考え、同窓会についての感想と要望をのべ、最後に、会及び会員の一層の発展を祈念して挨拶にかえる。





## 農学部を退職して

花 田 慧

風薫る新緑の候、皆様には益々お元気で活躍のことと拝察、お慶び申し上げます。

さて、私はこの3月で農学部を退職致しました。体調を崩したために職責を十分に果たせない虞を自覚したからであります。真に慙愧に湛えません。

顧みますと、私が恩師から「郷に入れば郷に従え、すべて弘前で教われ」と励まされて、当時の文理学部農学科の助手になってから37年が経過しました。この間、土壌肥料の一学徒として、実験室での快適な毎日を送ることができましたのは、先生方のご懇篤なご指導と同窓会員諸兄の温かいご支援の賜物でありまして、ご厚情に心からお礼申し上げる次第であります。

私が赴任したときの農学部は旧日本陸軍の第8師団憲兵隊司令部の小さな建物に、農学教室という標札が出ているだけの見すばらしい状況でしたのに、現在では師団司令部跡の立派な施設建物に変貌しました。また、開設当初10年ほどの教官陣容では、横山さんただ1人が本学出身者でしたのに、現在では農場

を含めた11教室の中堅を同窓会員が占めて、本務並びに学部運営のための各種委員として日夜精励しておられます。このご活躍の一端を学術報告の編集を例にとってみますと、初代の委員長は照井先生であられましたが、今は戸次さんがきめ細かい気配りをもってこの任に当たっておられ、私もついこの間まで大層お世話になりました。

このように、学部発展に貢献する学内会員のご活躍は半歩確実、真にすばらしいものであります。学外会員の皆様も大いに応援して欲しいと思います。

今後の私は皆様のご活躍を蔭ながら喜ぶ生活に徹し、なお若干の余力があれば未発表データの整理及び既発表データの解釈の再点検の作業に専従する所存であります。引き続きましてのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら皆様方のより一層のご活躍をお祈りいたします。また、この紙面を与えられた同窓会にお礼申し上げます。

## 転勤にあたっての御挨拶

豊 田 隆

卒業生の皆さん、ますます御清栄のこととお慶び申し上げます。このたび昭和63年2月1日付で筑波大学農林学系へ転勤することになりました。昭和59年9月に弘前大学農学部へ赴任致して以来、わずか6年5ヶ月の短い期間でしたが、公私にわたり格別の御厚情と御指導を賜り誠にありがとうございました。心から厚く御礼申し上げます。

この間、講義やゼミナール、農村調査などを通じて、卒業生の皆さんに御援助いただき、地域農業に根ざした農業経営学の教育と

研究に努力いたしてまいりました。その成果の一端がみとめられ、昭和59年2月には東京大学より農学博士の学位を授与され、昭和60年4月には日本農業経済学会賞をいただきました。これも一重に卒業生の皆さんのおかげであると感謝致しております。

弘前は落ち着いたすばらしい街でした。春の観桜会やソフトボール、夏のねぶたや八甲田山登山、秋の収穫祭やテニス、冬のスキーや追い出しコンパなど、四季おりおりの楽しい思い出が甦ります。



学問とは、今まで知らなかったことを知る喜びを共にすることであり、自由楽しく学ぶものであります。そのためには、継続こそ力であり、あわてず、あきらめずに研鑽を重ねることが肝要かと思われます。どうか卒業生の皆さんが、自ら歩んできた道に自信をもち、社会の各分野で独創的で個性的な業績をあげ、弘前大学の名を高めるような御活躍を

されることをお祈り致しております。

今後は微力ではありますが新任地の筑波大学で教育と研究に努力を重ねるつもりでございますので何卒いっそうの御指導と御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。皆さんに再会できる日を楽しみにしております。御機嫌ようさようなら。



## 支 部 だ よ り



### 秋田支部・第一会総会盛大に開かれる



秋田県支部の第1会総会が62年7月11日秋田市のパークホテルを会場に開催されました。参加人員は17名と第1回目の総会としては小人数でありましたが、なによりも前学部長の佐々木先生、同窓会幹事の工藤先生とお二人の懐かしいお顔をお迎えできたことで会員一

同の意気も上がり支部同窓会のスタートを飾るに相応しい熱気あふれた会となりました。

丹野支部長の挨拶の後、佐々木先生の来賓挨拶工藤先生の本部同窓会活動近況報告を頂いたところで会場は津軽一色、以降は会員の近況報告を交え、在学当時のそれぞれの思い出を肴に酒を飲み交わし、和気あいあいのうちに過ぎました。

2次会となるころには、酒量も適量をオーバー、全員が北浜寮のストームの如く近くの小料理屋に押しかけ、そこを占拠、話題は学舎からその周辺、そして鍛冶町から岩木山、大河ドラマ「いのち」へと津軽をくまなく掛け巡り、秋田の一隅に「弘前城の花見の宴」「津軽の喧噪」ともいべき一時を創り出した一夜でありました。

(幹事 鈴木記)

### 福島支部・62年度総会

そろそろ雪が舞い始めるかな?と、思わせるような晩秋の11月21日、我が福島支部では62年度の総会を開いた。昭和55年に結成してから8年目である。大学の30周年記念の年、それへの出席をその年の総会としたので、回

数としては7回目である。場所は奥羽山系の標高700mクラスにある中ノ沢温泉郷、なかなか良い所ではあったが、連休とかさなり、出席者が20名程度とやや少なかった。大学からは菊池教授の出席を得、毎年ながら夜おそ



くまで盛り上がった。

私ごとながら、大学を卒業して24年にもなると、仲間はもちろんのこと、諸先生方の顔と対面し、その話しぶりを聞くことにより、大学、弘前の街、など学生時代の青春がよみがえってくる。皆んなそうなのではないだろうか。(酒の量も多くなるわけである。)

そして、今、自分達が存在するんだ、と、……。それが同窓会の最大のイベントなのだと思います。

年令の差もあり、職場も異なり、もちろん個性がちがう者達が、同じ大学に学んだ、ということ集い合う。同窓会とはそんなところに大きな意義があり、そこから新たな「キズナ」が生れてくるものと信じている。福島支部の総数40数名。年々増えてはいるが、今年の春、福島県に来てまもなく事故で若い命を落してしまった同窓がいた。残念ではあったが冥福を祈ろう。



だけど皆んな本当にすばらしい仲間達であり、先生方、同窓会本部には感謝する次第である。最後はなったが、同窓会も年を重ねるにつれ、マンネリ化現象が一番恐ろしいことであり、活気がなくなつては困る。我々も努力していくつもりであるが、種々情報を知らせてもらえれば心強いと思っている次第である。 文責 松本 馨

## 教室だより

### 《農業造構・施設学講座》

私たちの教室は、農業造構学教室と施設学教室の二つに別かれていて、それぞれ、独自の活動を行っています。

農業造構学教室は現在、月館先生、角野先生の下、5名の学生が在籍しております。

これを読まれる先輩方の中には、月館先生(教授)、角野先生(助手)を御存じない方もいらっしゃると思いますので簡単に私たち学生から見た御二人の紹介を述べます。

まず、月館先生ですが、朗らかで、ジョークなども交じえて話しをされ、一見、どこかの優しいおじいちゃんタイプです。

次に角野先生は、大変に器用な人で、ちょっとした棚やテーブルなどは、自分で作られます。完璧なマイホームパパタイプです。

さて、私たちの現在の活動は、公務員試験

が近いのでそれに向けての試験勉強が主です。教室ゼミでは、マトリクス演算について学習しています。そして、さらにパソコンを使ひこなせるようにと、BASICの勉強もしています。そろそろ、卒論研究も始まり、増々、忙しくなると思います。

施設学教室は卜蔵助教授を筆頭に、木村、古川、佐竹、竹谷で構成されています。現在、この教室で研究されているのは、第一に、古川、竹谷が取り組んでいる消融雪溝(今、青森県で話題になっている)、第二に木村が取り組んでいる青森県における積雪深の関係(今後、施設学教室の伝統にしたい研究)、そして最後に、佐竹が取り組んでいるヤマセ(施設学教室、伝統の研究)の三つです。

学生が四人と言う事で暇があればいつも



ることは×××××です。そして、先生もこの×××××が好きな方なので、たまにはみんな卓を囲むこともあります。

最後になりましたが、是非、先輩方、暇を

見つけて、遊びに来てください。色々な、御話しが聞けるのを楽しみにお待ちしております。

(室長：佐久間記)

### 《農業動力学講座》

人力や畜力にかわる強力なエネルギーとして、は場での動的作業に内燃機関、収穫後の静的作業に電動機が使われるようになった。これらのエネルギーで駆動する農業機械を研究するのが農業動力学である。近代的な農業の営みには欠かせないものである。家庭菜園のような零細農業では農家の文化生活を保つことは難しく、農外収入に大きく依存している兼業農家は比較的余裕があっても、小規模の専業農家はかえって苦しい状況下におかれている。

栽培に合わせた機械化ではなく、機械に合わせた栽培方法の改善が必要と力説されてから久しいが、実行は遅れている。農学とか農業に関係する教育・研究者あるいは行政の指導者には農業機械の理解が乏しく、自ら勉強する姿勢さえ欠いている消極的な者が多い。農業生産はマクロな経営と農作業の中で展開され、ミクロな科学的手法によって改善されて行くものであるから、原始的な段階のまま

であったり、「農業栄えても農業衰える」ような転倒状態でも困る。もっと経済的な産業として存続することを前提とすべきである。

農業動力学教室は昭和46年に発足してもう17年を経過したが、教官の陣容は当初と変わらず、皆んな高齢化した。研究課題もそのままであるが、発展して学会の一翼をになっている。冒頭に述べた動力を登載した農業機械の実験的研究である。常に経済的農業を念頭においた態度で専門馬鹿に徹している。所属学生の中には複雑な農業の背景を知らないため、途惑やら、へっぴり腰やらである。ただ、どんな事象でも奥深く考え、能力一杯で処理する習慣を身につければOKと思っている。

もう社会に出て、能力を十分に発揮して、後輩の育成に力を注いでいる卒業生もいる。頭の毛が白く、また薄くならないうちに、基礎がためを終えてもらいたいものだ。同窓会諸氏の一層の活躍を祈って止まない。

### 教 官 人 事

#### 退 官

- 63.3.31 今河 英男 教授 (農業経営学)  
63.3.31 沢井 功 教授 (生物化学)  
63.3.31 坪松 戒三 教授 (畜産学)  
63.3.31 花田 慧 教授 (土壌肥料学)

#### 新 任

- 63.4.1 音羽 道三 教授 (土壌肥料学)  
63.5.16 石関 良司 教授 (農業経営学)  
63.6.1 石川 隆二 助手 (育種学)

#### 昇 任

- 62.11.1 工藤啓一 助教授 (作物学)  
63.1.1 嵯峨紘一 助教授 (蔬菜花卉園芸学)  
63.4.1 奥野智旦 教授 (生物化学)  
63.4.1 豊川好司 教授 (畜産学)  
63.4.1 宮入一夫 助教授 (生物化学)

#### 転 出

- 63.2.1 豊田 隆 助教授 (農業経営学)



\*\*\*\*\* 新しい先生を紹介します \*\*\*\*\*



北海道苫小牧生まれ、北海道大学農学部農芸化学科を卒業し、農林省農業技術研究所に入り、昭和39年に北海道農業試験場に移りこの3月まで居りました。こちらに来て2ヶ月近くになりますが、大学に

土壤肥科学講座 音羽道三

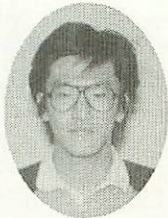
も町にも少し慣れて来たように感じています。趣味と云えるほどのものはありませんが、好きなものは、洋画・スパイ小説・野球です。若い学生諸君と一緒に、青森の土壤でこれまであまり調べられていなかった種類の土壤を研究できればと思っています。どうぞよろしくお願い致します。



北関東産の1930(昭和5)年生れです。長年農水省の研究所におりまして、若い頃北海道で過したことはありますが、これまで東京で暮してきました。赴任した

農業経営学講座 石関良司

翌日の夕に一面花盛りのリンゴ公園で農経コースの先生・学生の方々から心暖まる歓迎会を催していただきましたが、そのとき落日に映えた秀峰岩木山を身近に仰ぎみて非常な感動を覚えました。弘前は私にとって未知の地ですが、何卒宜しく願ひいたします。



6月に育種学教室の助手として着任しました。北海道大学を60年に卒業し、同大学の修士課程に進み、博士課程の1年目には三島にある国立遺伝学研究所の森島先生のもとで受託研究員生としてイネの研究をしていました。今まではイネの進化に係

育種学講座 石川隆二

わる事に興味をもっていました。これからは同教室ですすめている研究に新しい実験技術を取り入れていろいろな方面に着目していきたいと考えています。何分にも課程途中で着任したもので勉強不足の面がありますが、これから学生たちと共に学びつつ研究をすすめていきたいと考えています。よろしく願ひします。

追 贈

森田 昇 名誉教授に63年4月 従三位が追贈されました。  
(52年4月勲三等旭日中授章を授与)

訃 報

森田 昇 名誉教授が63年3月逝去されました。( 年81才)



## 事務局からのお知らせとお願い

## その1……………

63年度の会費納入者数は、727名でわずか30%弱に過ぎません。会費の早期納入をお願いします。

## その2……………

63年版の同窓会名簿が11月に発行される予定です。

ご承知のように、名簿は会費納入者にのみ配布することになっております。名簿は前年度までの会費納入実績を参考に幾分多く準備するつもりですが、品切れになることもあります。ご了承ください。

## その3……………

63年度からは会員の要望に応じて名簿を検索して、そのネームステッカーを1名18円で配布することにしました。ご利用下さい。

## その4……………

最近の農学部は、本会報をご覧になってお気づきのよう、先生方に多くの異動がありました。63年度も畜産、農地工学を始め数人の新しい先生が着任の予定です。会員の皆さん、来学の機会をつくり諸先生方との交流を計りましょう。

## その5……………

各地で活躍されている会員の皆さん会報を通じて情報交換をしませんか。各地の気候話題、その他ニュース、あるいはアンケートなど紹介したい情報や、同窓網を活用した情報取得に同会報を利用してはいかがですか。投稿をお待ちします。

## その6……………

同会報の編集についてのご希望、ご意見をどしどしお寄せください。

